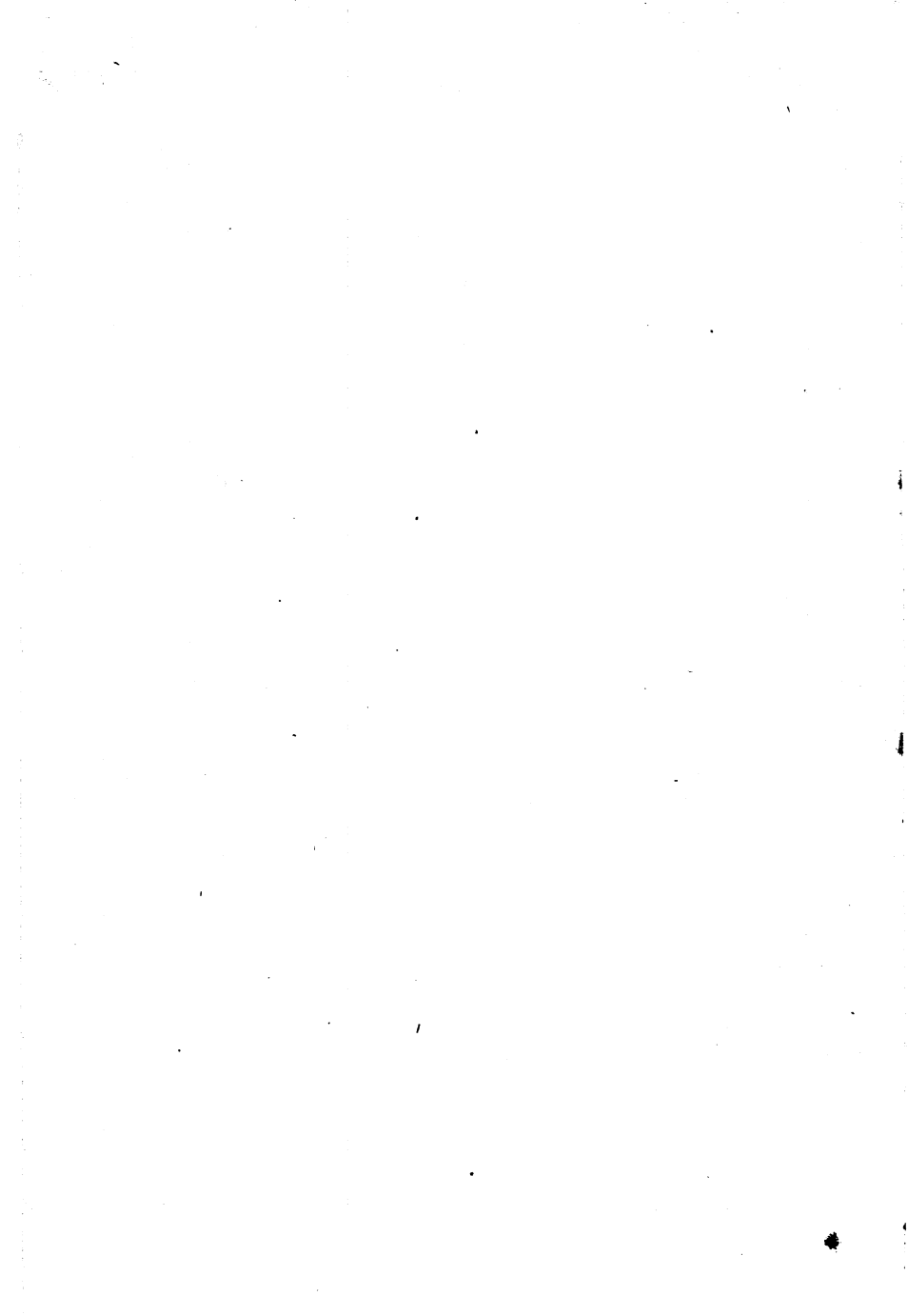


心中ふたつ腹帯



心中ふたつ腹帯

作 者 紀 海 音

地草に木にたとへて見れば若菜梅。女は櫻坊様の山吹衣ま袖より。牡丹のさかりりんとした。フシ武士の姿はおのづから。地色うぶにそみたる紅の園生のたねや末葉まで。わきて遠州濱松は御家中廣き其中に。小身なれど手置いておもき山脇十藏の。屋敷造のお物數奇其折ふしの月花に。かへて嗜む武藝の道初も深き藪垣の。向ふに目あての梁を構へ本弓の稽古的。戸田卜齋を師範に立て門弟沼津本之進。南條定七秦源八いづれも弓引きつがひ。拳を固め肘を張り鎌を揃へ聲をかけ。我劣らじと争ひしは。フシいかめしう。こそ見えにけれ。地色卜齋はつく／＼稽古に氣を付け目を配り。詞ホウおの／＼見事／＼。射法力の入れ所村の肉置矢の輕重。羽の吟味に至る迄残る所はなけれども。地どうでも體が固まらぬあながちに射勝たうと。思ふばかりは勵みてない一ぶんに油斷なく。工夫の心坐りなば自然と的中致すもの。詞既に孔子の曰ふにも射る事は君子に喩へ。あたざれば其身に求む。手前を直し隨分と功を積むこそ第一と。フシさも細やかに云ふ所へ。地色主山脇十藏は同苗半兵衛諸共に。かしこに歸れば卜齋。詞ハアア十藏殿お歸りか。豫てお心安さのまゝお留守をも顧みず。地射場を借用仕りゆる／＼稽古致す段。無禮の至りと相述ぶる。詞十藏會釋して是は扱痛み入る。よい場を持てば品により物干にさへ貸すならひ。地ましてや御念比といひ殊には豫て極の稽古日。在宿致す筈なれども。同苗半六只今は名も半兵衛と改め大坂の住居。町人に罷りなり候へども當所の人數改めにて。年に一度は極まつて判形に罷り越す。其儀によつて今朝より御役所へ召連れ出で。それより一家のはし／＼へ暫しの對面則ち今夜ハツ立に大坂へ立歸る。用意何かに取紛れ無亭主の段御免あれ。コリヤ半兵衛。

以前のお師匠友達衆對面致せと詞の下。半兵衛殿はんべゐだんに。詞先づ以て卜齋うしやう様。御息災ごきさいに御凌ごりやうぎ。ひとへに満足仕る。師弟のちなみ折々は御恩の御見舞申す筈。何をいうても只今は商人あきんどの身の忙がしく。地年ぢねんに一度の參齋さんしやうさへ昨晚参りて明朝は。罷り上る故。おのづからの如才者どうさいしや御免し下さるべし。詞李之進殿しんじん定七殿。源八殿を始めとして御無沙汰はかり。地顔見れば昔を思ひ懐かしい。先づは御無事で珍重ちんじゆうと身は町人を卑下ひげしても。どこやら武士の花うしはな。フシ八百屋さするぞ惜しかりし。地色卜齋は手を打つて扱うめく久し振り。山脇半六時分より殊の外肥満ふくみにて。究竟くわいけいな若者其骨柄こつぐらを見るにつけ。思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬たんれんせられなば。恐らくはつかうせんものと。常々皆とも此噺うたばな町人とても隠し藝。折節射ても見らるゝか。いかにく問ひかくる。詞半兵衛は打笑ひ。仰せの如く私めも折角習ひ受けたる弓。何しに捨ては致さねども。町屋まちやに道具散らばねばもとより學ぶ人もなく。地宮みや地を心懸こころかけくれども。流行はやるは稽古淨瑠璃で。半弓も見あたらず。たま／＼事に瓜時分東寺駒野うまのへ行く足を。祇園ぎおんの方へ駈廻り稽古を見ればぞくぞくと。遠慮も忘れ肌押脱おしだつぎ。よつびきひやうどやる風情。詞座中ざちゆう擧こつて舌ぶるひ。庭弱ていじやくな男ぢやが。地さつても怖おそい弓力ゆんりきと。手を置かれて歸りしも偏ひとへに師匠の御蔭ごかげぞと。あだ粗略そりやくには存せねども青物賣りの風情ゆゑ。残念ながら何時いつとなう。消えて仕舞はん是非しはいなさつと。フシへり下つてぞ語りける。詞ム、さこそ／＼推量すいりやうした。五十年射ぬとても心を捨てねば下くだらぬもの。地幸ひ柴あきも構へてあり久しぶりぢやに只一手。其上是なる李之進前しんじんかど互角ごかくの藝なりしが。詞荒むと勵む違ひにて及びはせまいさりながら。地互に挑いどみし所縁しよゐんありいざ立合つて勝負しやうぶあれ。フシはや／＼見んとぞ勧めける。地色半兵衛押退おしすり左様の論は武家の沙汰。我々しきが何ともはや。御免／＼と辭退じたいする十藏は聲をかけ。詞末練に見ゆる半兵衛。差當てゝお師匠の仰せを背くは無禮なり。手練達者しれたつしやの沼津殿町人の身が射負けしとて。少しも恥にならぬ事。地罷り出てよと弓と矢を取添へて與ふれば。答に及ばず立上り。詞李之進殿しんじんさりとては。久しうぶりのお相手と。地云へどもをさめし不承顔ふしやうがほ。かぶりを振れば半兵衛相手の不足は兎も角も。不興ふきやうに見ゆる御出てと詞

をかくれと返事もなく。苦<sup>にが</sup>り切つたる其風情定七見かねつと立ち。詞時によつては氣不精に進まぬ事も得であるもの。地某相手と云はせも果てず李之進聲を上げ。詞ア、是々入らぬもの。師匠の御意を承る我等さへ動かぬに。外の媒<sup>さかい</sup>介心得ず控へられよと詞の下。然らば拙者參らんと源内やがて立つ所を。鎧<sup>こり</sup>を取つて引留め。ハレヤレ世話をやく衆かな。相手になればいづれもの名が廢<sup>た</sup>るが合點か。地且はお爲を存ずるゆび(おトアルベシ)是非くお控へなされよと。物ありげなる有様に。フシ座はしらけ。てぞ見えにける。地色半兵衛もなまじひに無念に及べどさらぬ顔。李之進殿手が悪い貴殿の藝を仕上げしとてさのみ高うは吹かぬもの。地今は格別其以前互に勝負を較べし時。五社明神の後堂<sup>うしつどう</sup>百本が一本も。徒矢<sup>かたや</sup>なしに見せつけ又。掛川の大會<sup>かけがひ</sup>にも二日續けてゐるもきに勝ち。其外機により折にふれ餘程手ごりの覺えがある。その意趣<sup>いしゆ</sup>ならば猶以て。わつさりと立合はん。フシいざ御出でといひければ。地李之進え笑ひ。珍しい事いふ男。シテ先づそちが某と弓のこぶしに勝つたとも。ハテ先立つて知れた事シヤ存外千萬な。其時相手に立つたるは慥か山脇半六とて。御家中の武家友達。大坂の八百屋づれ半兵衛とやらん素町<sup>すまち</sup>人相手に取つた覺えがない。地いはれぬ弓を引かうより分相應<sup>ぶんたうせい</sup>に算盤<sup>そろばん</sup>の。利合<sup>りあひ</sup>を引くが近道と。さも憎體<sup>にくてい</sup>に言ひこなす。地半兵衛今は堪忍の胸に迫りし顔色<sup>がしよく</sup>を。卜齋早く見て取つて真中<sup>まなちゆう</sup>につゝと出で。詞よしない所望仕出して半兵衛手前某が何とも迷惑<sup>めいわく</sup>致せども武士の權威<sup>けんゐん</sup>を立てらるゝをたつてとも申されず。と云うて是で果してはどうも一座が濟みにくい。中立てゝ了簡<sup>けん</sup>せん。弓の稽古は取置いてこれから柔術<sup>やわじゆ</sup>の勝負を見よ。地さあゝ急いで立合へとあせれば半兵衛力を得。いざお相手と差向ふ。李之進突<sup>と</sup>り聲。詞武士町人の辨へなく再三のお望みは。お師匠にも曲<sup>まが</sup>なしと云はせも果てずヤア無法なり。詞李之進。もとより弓馬は武士の藝。取手柔術<sup>じゆじゆ</sup>は町人も身の要害<sup>えきがい</sup>に嗜みて。すはや取るぞと立向ふに。武士は相手にならぬとて懷手<sup>ふくしうで</sup>してゐるゝか。是非立合はざるまいがの。地然らば有無<sup>うむ</sup>に及ばぬ事。さあゝ勝負とせり立つれば。義に詰められて李之進不承<sup>ふしやう</sup>々々に身拵<sup>みこしらへ</sup>へ。嚴<sup>い</sup>つがましくいざ來いとかさにかゝつてつゝと密<sup>ひそ</sup>る。心得たり

と身をかはし互にあてつけ跳ね合ひしが。半兵衛は手利の達者。ほぐれて蹴返す腰の骨。仰向にどろと倒れしはフシ心地よくこそ見えにける。地色鷹打拂ひ李之進はふく起きて大聲上げ。地表裏者の賣人め。重荷に草鞋締めはいて。平生荒氣に働く故。地畢竟相撲同前の暴れ業は間にあはぬ。いで眞劍の切先に命の取手を見すべしと。既に刀に手をかくれば。調ふ、町人の双にて侍首の柔術を見んと。地飛んでかゝるを定七源八李之進に取りつけば。十藏は半兵衛を引止めて叱りつけ。調お師匠の御差配にて一旦の無念を晴れ。喧嘩は互に五歩の持ち。事相済んだ其上に縦へ先から募るとも。地最早見ぬ顔聞かぬ顔穩便にをさざる筈。此上ながら卜齋老李之進殿心底に。憤りなき様に偏に頼み存ずると。さも神妙に云ひければ。卜齋は打顔きいかにも某受取つて。重ねて盃させ申さんとかう云ふ間に日も暮るゝ。最早お暇申さんと皆打連れて立ちければ。李之進振返り。調たま／＼腕が利いたとて。いきり立つは商人故。武道は格別劍術が。知りたくば此方へ習ひに來い其時は。さつぱりと首と胴との別れの指南。地きやつと云はせて見すべしと。肘押張つて睨みつけ。さも憎さげに立歸れば。十藏親子は送り出て。慇懃に一禮し。フシ次の一間に立歸り。地色互に今の無念さを胸に持てども持たぬ顔。十藏は何となく。調コレ半兵衛。夜の短いに入つ立ち。草臥も續いたくつろいでお寢やれ。ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は買うてもせいと申します。地御老體の養ひが大事先づお休みなされませ。ホウ老いては子に従へとは得手勝手手の謔。然らば行つて寢る程に。追付けまどろみ召されいとオクリ言ひ捨てゝ奥にぞ。フシ入りにける。地色半兵衛は差俯向きとつおいつの胸の内溜息ほつとつき出し最前の惡言を無念と思ふ秋より。調百千層倍口惜しうお腹が立つてなりますまい。天晴山脇十藏と。誰に劣らぬ武士の身を。地半兵衛といふ町人を子に持ち給ふ故により。いかい恥辱を見せまして面目なうてなりませぬ。調姿形こそ町人なれ。もと侍の忤ぢやもの。駈入つて死んでくりよ。イヤ／＼それでは仁右衛門殿。よしない武士の子を貰ひ。憂目を見ると悔い恨み。地歎き給はんおいとしゃ。武士と町人二人の親。中に立つたる半兵衛は。いづれへ孝を立つべしと。スエデ拳

を。握り居たりしが。地短氣の蟲のせき上げて。兎角堪忍なり難く。討果さんと覺悟を極めそつと立つて目を配り。奥を窺ひ床にある。硯引寄せ行燈の。火もかき立つる筆の跡死ぬる仔細は書かねども。是迄の御恩の書置一通り。さらさらと認めて。巻き納めたる箱の蓋。詞新穀油懸町八百屋仁右衛門殿。生所遠州濱松。地山脇氏と書く所に奥よりけはしき足音。南無三寶と懷へ隠すとはいざ白無垢に。尻ひつからげ鉢巻しめ。手鐃かい込み十藏は。逸散に駈出づるを半兵衛やがて駈塞がり。互に顔を見合せ。フシハツト驚くばかりなり。地色半兵衛は取纏り。詞死出立にてあわただしく。逸興千萬何事と。地間はれて猶も氣を苛ち。詞ヤイ云はずとも知れた事。元來今日の口論も。もとを糺せば此十藏。娘が事を先立つて。きやつめが妻に貰はんと。ひたすら申越したれども。無骨者を知つたる故。再應使を受附けず。地山名郡の代官。豊田新之丞と内縁を取結び。家督を立つる爵愼にて。思ひも寄らぬ汝に迄。恥を與へし其段は許してくれよ半兵衛。詞エ、さぞ無念口惜しかろ。見てゐる親を推量せい。卽座に討つは知つたれども。地汝に怪我のある時は養ひ親への言譯ない。それ故事を鎮めたり。半兵衛が一分を十藏立てゝやるべしと。又飛出るを押しとどめ。詞おせきなされな待つてたべ。私が名を下さじと。命に換へての親の慈悲。忝くは候へども心を静め御思案あれ。出合の詞争ひにも恥を研ぐは武家の事。地町人の半兵衛が恥といふは駈落か。身上仕失うたるか。是より外は叱られても。ぶたれても踏まれても。此境涯の今の身に。一分立は候はず。然るに何の御生害思しとゞまり給はれとフシ事をわけてぞ詫びにける。地色十藏は聞入れず。詞其方ばかりへ義理でない。大坂の養ひ親仁右衛門方へ聞えても。たま／＼國へ立歸り恥辱を取るにきよろりと。實父が脇見してゐるはよく／＼半兵衛惡事ぞと。地疑はせては猶立たぬ爰を放せと詞の下。詞ハアさりとては聞分けない。其仁右衛門も町人。國元へ行き手を廣げ。榮耀をしたと噂せば。悔み腹立ちあるべきが。喧嘩の場を穩便に済ましたと聞かれたら。地いか程か喜ばれん少しも氣遣ひ遊ばされな。詞御身の武士引當てゝ世間の氣をも置られず。地輕々しき生害はお年に似合はぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。

子孫のためと思召しとゞまり給へと様々に。スエテ心を籠めてぞ諫めける。地色十藏つくく聞入つてやうくと打領き。詞ム思ひ廻せば一理あり。地然れば生害とゞまらんと持つたる鎧を下に置き。フシいうくとこそ坐しにける。地色半兵衛は喜びて御聞入れ忝し。とてももの事に御誓言承らんと根を推せば。侍冥利大小かけ神以て偽らない。扱其方はいふ如く。町人の氣になりぬいて。武士の恥は用ひぬな。ハテ扱あまり御念が入る。毛頭虚言仕らぬ。ム、然らば慥かな誓言く。ハア何が扱町人冥利乞食になる法もあれ武士道は立てますまい。イヤ町人の誓言は利慾に迷へば斷も立てる。汝に望む誓言は最前書いた狀箱。只一目見て安堵せん。地其誓言が望みぞとせり立てられて半兵衛。ハツトばかりにうろつくを。十藏聽て立寄りて懷中したる狀箱を。引つたくれれば詮方なく差しうつ。フシむいてぞ居たりける。地色十藏涙をはらくと流し。詞汝が短氣を知りし故。襖の間より差覗き。最前よりの有様を一々残らず見届けし。地二人の親の恩ばかり思ひ出して大殿の。御恩の程は忘れしよな。詞十二の年より御前へ出て小姓數多ある中にも。勝れて御不便加へられ其餘慶にて十藏も。武士の御加増頂戴し。喜悅の肩を開きしに。長崎よりの客僧。賢藏主といふ相人。汝に双の難ありと密かに殿へ傳へし由。殊なう驚き思召し。御前に人なき折節某を招き寄せ。しかくの御咄天命とは云ひながら。陣中の討死か忠義の爲に相果てば高名ともなるべきが。短慮の生れ出頭の。當言咎め口論に討果さんは無慚なり。町人にして一命を繋げとあるの重き御意。地もとより迷ふ親心何が扱我子の爲。畏り奉るとお受け申してそこ爰と。尋ぬる内に縁あつて仁右衛門方へ契約し。お暇乞ひに汝をば召連れ出てし其時の。亡君の御喜び今見る様に忝し。詞即ち只今差してある。藍鯨の脇差をお膝元より取出し。長く武道の絆を切り。町家に住めば一腰は。命の親とも主君とも。敬うても飽き足らず。双は命を亡せども。助かるも又双なり。地輕しく用ひなと御手づから賜りしは。汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれども我子を君に差上ぐれば。忠義の爲に一命を惜しむなと教ゆるに。町人にして其方が安穩なれとの御憐み。親十倍の主君の恩それを忘れて短慮にも。討果

さんとは何事ぞ。天命知らずの不忠者と。スエテ口説き立てゝぞ。泣きにける。地色稍あつて涙を押へ。狀箱をしつかと封じ。我印判を取出しとちめにひしと押認め。半兵衛が前に据ゑ。心を靜めてよく聞け。詞其脇差は君の魂。此印判は身が魂。書置開くは死後のこと。それをとちるは大切な命の門を固むる封印。地色堪忍の締口を開くまじとの誓文にも。起請文にも此文箱。肌身を離さず懷中し是神明のお祓とも。守りとも印文とも誓ひを立てゝ忠孝を。思はず身をば顧みて。死んでくれるな半兵衛と。心詞も瀧津瀬に袖は。筏と浮きにける。半兵衛前後涙にくれ物をも云はず居たりしが。押直り聲を上げ。詞ハア淺ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲養父へ孝の三つの海。地渡り較べて數ふればたとへ我身を百千に。碎きても飽き足らず生あればこそ骨に沁み。胸に通ひし御意見を何しに餘所になし申さんふつゝと心を取直し武道は口にも出すまじ。過り入つて候と。スエテ手をつかへてぞ詫びにける。地色十藏につこと打笑みて出来したり満足せり。いよく相違あるまいな。詞ハア何が扱鬚へさぬ。ヲ、嬉しや落着いた。地はおぬしが可愛さと。フシ又打解けし涙なり。地色はや丑三つの鐘の音に續くしやんゝ馬の鈴。門外に聲高く。詞サア旦那殿八つが鳴る。あぶつけ跡付蒲團ばり。地早うゝと呼び立つれば。半兵衛ハツト立上り時刻に及ぶ御暇ヲ、ヲ、まめで。御堅固で。是程目出度い別れはない。さらりと笑うてゝと。顔見合するにつこりも後の。名残りと三重へなりにける。

## 第

## 二

フシ難波津や。賑ふ門も小夜更けて。駢較ぶる鐘の聲。數は幾つぞ八軒屋。海士の漁とかゝげたる。宿の行燈しんゝと。濱風あをつ上り場に。遠近人の下り舟。押並んでぞ舉り寄る。地船頭眠りを呼覺まし。詞サアゝ着いたぞ上らしやれ。置忘れのない様に。地諸事改めてといふ所へ。泊り宿の亭主。三笠屋與次兵衛出て來り。詞待つたゝ船頭

衆。改める事がある。宵の内から我方に上の衆ぢやが二三人。駈落者のお尋ね。嶋原の色ぢやげな。地残らず船を吟味して頼む／＼と擧げば。船頭ども聲々に。類船の内やう／＼と女中は二人ばつかり。一人は内儀様一人は若いぼつとり様。それ／＼そこへあがるゝ。勝手次第に穿鑿とぞわめく内にしと／＼と。苦もる露も情知る。ゆかりに靡くなき袖や。小棧に色を抱帯はてな姿の女房に。姿の連立つ其風情。荒れし軒端に三日月の。フシ光こぼるゝ如くなり。地色與次兵衛立寄り提灯の。影に見るより打顔き。詞マア大方これくさい者。ぬく／＼と駈落ぢやの。地追手の衆が此方にぢやいざござれいとせる所へ。次の舟より半兵衛は遠州よりの歸り足。何心なくあがり場に男女のわめく聲。立寄って小提灯ヤア女房か。半兵衛殿。これ伯母様扱々と。互に餘儀なく見えければ。與次兵衛は猶うさんげに。フシ控へて様子を窺ひける。地色半兵衛はしとやかにどなたかは存せねども。誰も心のせく時は人違はあるもの。まさしく是は身が女房外をお尋ねなされいと。云へども與次兵衛喰はぬ顔。詞扱は左様かいか様にも。町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗。御亭様なら一連かと。地思へばさうでもありそむないはれやれ御鹿相申したと。オクリ詞をへ残し歸りける。地色半兵衛打笑ひ鹿相者と惡銀は。いかさま世間に多いもの。して先づお千代伯母様と。何故の上のぼり。お袋様は御無事なかどうか様子聞きたいと。詞の内よりせき立つてお千代は懺て取付くを。伯母は駈寄り引放し。詞エ、未練な。なんにも云やる事はない。地こつちへおぢやと手を取るを。半兵衛とぞめて興醒め顔。詞伯母御はいかう不機嫌なが。女房に恨みが身にあたりか。地何とも合點の行かぬ事お千代どうぢやと尋ねれば。伯母はいよく氣を悶え。詞扱しら／＼しい空とぼけ。それに嵌つてお千代はの。とぼけ倒れになりました。地はあこれも云ふまいさあ來いと。急ぎ立つれば半兵衛は。なほも向ふに立隔て。詞それは餘りに頑固。疑ひまがひもある習ひ。善惡共にいつまでも様子を聞かんと苛ちける。地お千代涙の下よりも。間はぬもつらし問ふも亦。武藏鐙のかけてだに。知るし召されぬ事ならば。聞いて憐を。フシかけてたべ。地色お留守の内に思はずも。姑去の力なく。しよう事なさに

すごくと里へ戻りて母様の。朝な夕なの煙さへ立兼わ給ふ其中に。詞四五日かゝつてゐる内に。此伯母様が京参り。立寄り給ふを幸ひに行くへ定めぬ下り舟。地淀まぬ水の縁にて。相見る顔は變らねど。變るは今の我身の上。男の心は川の瀬に譬へてあれど自らは。飽かれた仲とは思はねど。母様や此伯母様は。お前も一つ辛ざと恨みて今のすね詞。言譯をして給はれと口説き。フシ歎くぞ道理なる。地色半兵衛ハツト怪顛して。騒ぐ心を抑鎮の歎くは道理なりながら。不慮に爰にて出逢ふが夫婦の縁の切れぬ故。思案しがくもあるべきぞ氣遣ひすなと言ひ宥め。詞これ伯母御。お腹立ちは聞えたが身どもへあたりは不了簡。當月初めつかたよりも參宮致し直ぐさまに國元へ罷り越し逗留は只三日。其外は皆旅の空狀通致さん様もなし。地留守の間の言事を半兵衛も一所とは。廻り過ぎたるお疑ひ。機嫌直して此上の相談あれと詫びければ。詞ナウあてどのない事恨めうか。こなたと豫て相談の慥かなしるし是見やしやれ。姑御の直筆。お千代をば去狀。夫婦の仲の退き去りは誠の親でも我儘に。さつぱりとはならぬもの。地腹貸さぬお袋が心一つて書かれうか。是でも物が云はるゝかと。半兵衛に投付くれば。不審ながら取上げてつくく見れば暇の狀。是はとばかり差俯向き二度。フシ呆れて見えにける。地色伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙。聞えぬぞや半兵衛殿。こなたは元が由ある身仁右衛門殿も歴々。千代が一家は吹けば散る。こちと風情は疎まれてもとより縁はきたないもの。女房さへかはゆくばそこに隔てはあらぬ筈。姑御のさがなうて取りにくい御機嫌に。辛抱するは何故ぞ男の顔を樂しみに。暮す女房に口出して虫鼠こそなるまいけれ。陰日向になる程の氣骨は折つてやられても。さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに物も見事縫ひます。書出し一つする程の目は親達があけて置く。紡績なら人あひなら。器量はこなたの覺えてなり。ちつとの落目は華美なれど若い時が二度はないさのみ無理にもあらぬ筈。花の盛りを狼狽へて京の親元三界へ。行てもあらぬ贅しさを脱み合つても濟まぬ故。身の片付きを奉公と思ひ定めて連れて來た。さぞ本望でござらうと。たくりかけく。フシ口説き。唧つぞ道理なる。地色半兵衛始終を聞入つて成

程成程一通り。かう見た所は私に恨みはことわりさりながら。神しん以て存ぞんぜぬ段。地ぢいか様の義ぎも致いたさんと。立ひ寄る拍ひ子しに懷中より。狀箱の落ちけるを伯母は取上げつく／＼見て。詞苑名は八百屋仁右衛門樺山脇氏半兵衛とはこなたの事ではござらぬか。狀通は致さぬとぬけ／＼とよう云はしやるなう。地ぢ定めしお千代が事であるどのよな慘じい談合だんあぞ。封切つて見ましょわい。詞いやく／＼さうした物でない。此方へ遣はされい。ハテ紛まれない隠かくすまい。地ぢ讀よんでなりとも腹愈はんと既に封印切りかゝれば。半兵衛周章しゅうしょうてもぎ放し箱を開ひらくれば忽たちちに。疑ぎひは晴はるれども親の意見の命の封。切るに切られぬ恩愛の深きに代へてさがなくも。養ひ母の胸むね慾よくさ思おもひ廻せどさすが又。隔へてし中と義を立て、口には出さぬ品々の。恨みはせめて目にもるゝ、フシ涙に晴はらすばかりなり。地色ぢしきお千代はくわつとせき上げて。詞欺だしやつたの抜きやつたの。地ぢ其心とは知らずして母様や伯母様の。恨み誹そりを言いひ宥なめ半兵衛殿はいとしげに。さもしい心はござらぬと發言はつげん放つて今更に。面目ない恥かしい恨めしの男やと。肩に喰くひ付き膝ひざに寄り身を悶もゆれば袂たもとより一通の文落散ぶんらくさんつたり。半兵衛ちやくと取上ぐれば其手に取付き嚙かみ付けいて。大事の物ぢや戻してたべ見せては悪いと周章しゅうしょうてしを。取つて突退つたいけ睨にらみつけ。詞去しきられた様子が知れかゝる。勿體なくも母人を邪險じけんな心と恨みしが。却かへつて慈悲であつたよな。暇を取りは取つたれども不慮に遇うての間に合あひ口。間男の出合であひ宿。伯母御のいかつい返禮に。痴ち話わ文讀ぶんよんで聞かさんと。封押切つて繰開くけば。コハいかに最期さいきの一通。地ぢハツト思へど心を鎮めて讀上よぐる。形見ながらに書置の事。一つ我身拙わがみうして半兵衛殿と夫婦になり申す上は。お二人様をば誠の親より大切に思ひ／＼。されども足らはぬ心からお氣に入らぬのみならんに。今迄の御憐あやみ。天山てんざん忝かたじけなく思ひ／＼。一つ夫婦となり申してより。つひに一度の詞も荒らし申さぬ中に。思ひも寄らぬ別れを致し候事よく／＼の縁ゆかりの切目と悲しき此事に候。一つ高麗橋かうらいはしの伯母様へ。歸り候事も恥かしく石町いしちょうの伯母様。京の母様いづれも貧しき暮らしに候へば。身を寄せ候事も痛はしく候。かれこれ思ひにせまり命いのちの際きわになり申し候。残り多きは盡はきせぬ仲。取分けかけゆきは宿りし我子。共に消失

せ候事わく方もなきこの身の因果。夢の世の中とは申しながら。又改めて夢のやうにかへすゝもはかなく思ひろくかしく。地色ハツトばかりに讀み終り。三人共に差俯向き。スエテ聲も立てずに泣き沈む。お千代やう／＼顔を上げ。とやかう思ひ直しても。夫に離れ長らへてあらぬ命と覺悟して。此世の名残り母様にお目にかゝつて其後は。身を淵川に沈めんと思ひ詰めしに伯母様に。逢うての後は折もなく。今迄長らへさぶらふぞや此世の縁は薄くとも。未來で長く添ふべしと。楽しみにした我身をば。慘いとはかり半兵衛を。じつと見やりし目の内に。恨みと戀の二瀬川。フシ満ちくる沙ぞ涙なる。地色伯母は思はず聲を上げ。ア、しほらしの心やな。世には去られた夫への。面當のまた意地のとて。つい嫁くもあるに扱。命を捨て、先の世を頼むと迄はいにしへの。嫁鑑にも勝るべし。さりながらとつくりと合點をして見てたも。そなた一人を親伯母が。頼み切つたる杖柱男へばかり道立て。二人に孝はないものか嫁入さうとも云ふまいし。奉公さしよとも申すまいいかなる貧苦を凌いで。まめな顔見りや嬉しいぞや。必ず死んでたもるなと。フシ歎き。佗ぶるぞせつなけれ。詞半兵衛涙拭ひ。思ひ詰めたる志満足せり過分なり。何を隠さん某も國元で口論し。打果さんと思ひ詰めはや書置まで認めしを。親十藏の御意見にて命を緊く封印を此狀箱に捺されし故。深き疑ひ受けながら聞く事なりがたし。半兵衛が書置は父が見付けて命を延ぶ。今又そなたの書置を半兵衛が見て助くるも。地行末目出度い吉左右なり。町衆又は同行中たゝき廻して近日に。再び内へ呼戻さん伯母のお千代を暫しの内。こなたへお預け申したい。詞ム、口では見事さばけれど。いつまで草のつり詞。地色合點がゆかぬとかぶり振る。半兵衛は思案して。詞然らば今より日を切つて五日が内にさつぱりと。地お千代を内へ呼入れん。それ迄のお情を了簡あれと手を摩れば。伯母もやう／＼聞入れてさうさへなれば互のため。もしも五日が過ぎたらばこなたの内へ持込むぞや。詞それ迄何しにせつばして。手廣う迎ひにやりまする。違ひはないの。地誓文と。互に堅めある折ふし。駕やりませう駕やろい。フシやりましよいとぞ云ひかける。地色幸ひ東も白んだり人目を忍ぶ夫婦

づれ。千代をば乗せて駕のとに。付けしねうちも坂東聲。フシ實盛なりと人や見ん。地かゝる所へ與次兵衛が。噂に  
寄りし亡八(くわ)の者はたゞと駈來り。詞此駕なほ紛れ者ソレ引出せと罵れば。半兵衛駈隔て。近頃無體千萬。此内は身  
が女房。荒氣を出さずと通られと。地ことわり云へば聞き入れず。お内儀様拜みたいぐ。フシとばれかゝれば。詞ヲ  
ヲ女房の開帳なら。先づ三百目持つて來い。ヤア僞るまいぬかすまい。それ見よと駈寄るを。地ならぬと支へて入り  
亂れあなたへ押合ひ。こなたへくづれ。暫し捻ぢ合ふ其隙に。一人はづして駕をあけ。提灯かゝげびつくりと。詞こ  
りや違うたと飛退けば。地皆一同に首尾悪く揉手をして腰かゞめ。詞ハハくく。結構なお内儀様。是をついでに  
お近付き。笠の。地御用に立ちましよと。フシ云ひ捨てゝこそ逃にけれ。地色半兵衛怒り押鎮め。本意なければども  
親よりの意見の狀箱押戴き。堪忍するが町人風。女房は又當世の風世間の人が誂らうが。母者人がくすべうが。此ば  
つとした佛を。我等が宿のお千代ちやと打連れ。てこそ三重へ歸りける。

フシ世の中はしんきくの薪うつぽ。地水火風を借住居。先陰早き八百屋見世内證ともに吉野葛練れた親父は結構者ふきの姑にが口に。嫁菜の袖をひたし物千代とはあだの女松茸。二世の縁さへ瀬にかはる。浅草海吉と身は焦れ。何としやうがも松露にも。心ばかりをつくぐし。筆には盡きぬ憂きふしや。宵庚申を精進のだしに使うて半兵衛は晝より出でし留守まもり仁右衛門甥に嘉兵衛とて。地戀の物馴れ譯知りが首尾をくろめる墨硯。手代利介が算盤も。フシ氣のとくくと弾くなり。地色後世のもとの念佛講闇路を照らす小提灯。仁右衛門夫婦奥より出で。詞ホ、ウ嘉兵衛。奇特に精が出る。若い間は銀ずき。年寄つての談義ずき。是人間の一大事同行結の掛銭もない袖振つてはつきあはれぬ今宵の當屋はいつとて。法度を背いて夜食が出る。酒もしゆんだら夜が更けう。半兵衛が追付け戻る。

迄見世をばあけな寝まいぞと。老の繰言こまやかに。詞のあとも針を持つ姑はつこと聲。詞半兵衛は今夜戻りやせぬ。  
 表も裏も締めて寝や。地夫婦が聲で叩かずば必ず戸をばあけまいぞ。合點がいたかと云ひければ。詞コレかゝ。さか  
 なる物をおいやるな。養子に來てから今日迄。夜泊りをせぬ半兵衛が。庚申参りすればとて戻るまいとはなせおしや  
 る。サア半兵衛の参りやつた庚申様は石町。伯母の所へ先度から嫁の千代めが來てゐるげな。顔突合せ夜もすがら庚申  
 待をしをらうと。地女の性は嫁や子の中も法界悟氣口。内外の者の聞く前も迷惑さうに仁右衛門は。詞はて扱それ  
 もまゝにしや。見ざる聞かざる云はざるが。庚申様の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と。地繰る數  
 珠の。呟きながら打連れて。オクリ表へこそは出てにけれ。フシ接木の。枝は。雨露の。恵みも薄き桃櫻。半兵衛  
 夫婦が身の上に今こそ。思ひ知られたれ。地色五日と限る約束の今日さへ暮れて初夜の鐘。覺悟は胸に極まれど同行  
 中の扱ひを。もしやとばかり頼みにて。知死期待つ間の二人連親の目盜む夜歩きは。我宿ながら忍ばしくそつと潜に  
 耳寄せて。フシ内の様子を窺へば。地色嘉兵衛は筆を持ちながらつく／＼物を思ひ顔。詞ナント利介。お婆が先の氣  
 相でも。寺同行の御意見で。邪険の角が折れうかい。イエ／＼存じも寄らぬこと。生れ付いたる熊手性。今度の起り  
 も根が慾から。按摩取の印可めが。跡先なしの饒舌口さる浪人の娘とやら。年は十八數銀は大金で七十兩氏系圖より  
 確かなる商人へやりたいと。頼まれますと聞くとはやわ／＼しいわるが小聲になり。どうやらそれは耳よりな。かね／＼  
 お主も知る通り役に立たずの嫁御寮。地さりと去つて其跡へどうぞ世話して貰うてたも。燭をして來い一杯と天目  
 酒に吞込んで。先へ言込むこちらへも。返事聞かせてひつそ／＼。鎖き合ひの最中と。聞くさへ胸もひいやりとお千  
 代はそこを立退けど。半兵衛はまだまい／＼と。フシ這入りたさうに覗きゐる。地色袖口取つて引戻し。扱衆の返事  
 迄。待つこともない我々が最期の衣裳も守り迄。小宿へ出してある上にうろ／＼そこに居給ふは。今の咄にお心が残  
 りや。すると恨むれば。調ア、よしない事をいふ人かな。おれは心が残らねど。去られたそちを此内へ。呼戻したる心

にて中戸口から手を引かば。地それぞれ誠の夫婦づれ恨み悔みも晴れぬべし。思案こそあれ暫らくと立忍ばせて半兵衛は。潜押しあけずつと入り。詞兩人共に待つたである。日暮れぬ先に戻らうと思ひの外に當月は。いつにかはつて大参り仔細を聞けば去ぬる夜。地音響き花降りて雲中に御簾を上げ。庚申の御神體青面金剛童子とは。文字も青き面と書き青きを好み給ふ故。青物賣りを守らんとあらたに御告げありしよし。言傳へ聞傳へ市の側から打ちあけて。参る程にける程に御門前から押合うて。鰐口の緒へ取付く迄ゆつくりと三時半。かゝる尊き物語聞いて内にはゐられまい。嘉兵衛も利介も参つて来い。参れ／＼とそやされて。常も利介はとび介で。帶もそこ／＼。フシ誣出づれど。

地色嘉兵衛はじろりくわんとした。顔付さへも氣味悪く。やゝ暫しためらうて。詞親父や母は同行衆兎や角とある挨拶に。夜明けてなくば歸られまい。隠れて嘉兵衛も参つておぢや。いやまあ止に致しましよ。相場の悪い折節ひよつと知れたらあの婆が。地並大抵ぢやあるまいと。取つてもつかぬ挨拶に重ねて返す詞なく。成程それはよい嗜み其心から此頃は。商賣に精が在る旦那衆から青物の。御用はいうて來なんだか。詞誠に忘れて居ります。平野屋敷から明日は振舞をする半兵衛に。ちよつと参れとお使が二三度も立ちました。ム、さうであろ／＼。行かざばなるまいさりながら。殊の外なる草臥やう名代に往て聞いておぢや。イエ／＼先より念入れて。蹴立も相談する。直きにとあるの御使。地御太籤ながらと動かねば。半兵衛はわざと腹立て聲。詞仔細をこねる男がある。蹴立一つ書く程の器量を持たぬ其方なら。明日が日にても半兵衛が死んだら八百屋仕舞ふかと。地きめ付けられて是非もなく。フシ不審顔して出て行く。地色影見送りて表へ出て千代が手取つて引入る。跡は鎖しに詮方も。スエテ涙先立つばかりなり。千代は覺えず聲を上げ移れば變る世の中や。二人添寢の諸白髮千年と頼む我家を。今日は冥途の旅やどり手馴れし襖押入も。名残惜しげにあそこ爰。見世の先なる小板敷撫てつ擦つゝ戴いて。仁右衛門様の折節に爰に坐つておはせしと。フシ思ひ出すも懐かしや。地不調法なる自らが悪い所を陰になり。日向になつて明暮に。姑御へのお取成し。數限りなき御

恩をば死してもいかで忘るべき。去らるゝ朝も贈して手づから御膳据ゑたれば。物をいはずほろりと泣いてお箸を取られたる。其面ざしが見納めとなり行く身こそ悲しやと。フシむせかへ。るこそ。道理なれ。地色ともに泣音の半兵衛。詞尤なり。フシさりながら。地そなたの事は数ならず國を離れて十五年。誠の親より大切に介抱ありし甲斐もなく。長地先立つ我は不幸とも物知らずとも思されん御心底こそ恥かしとしやくり。上げてぞ居たりける。フシ餘所にも無な。袖の雨。風呂敷包み手に提げて。嘉兵衛すたゝ立歸り。しやくれど開かぬ表口わるゝばかりに叩く。地色二人ははつと立上りよろつく内に外よりは。あけよゝと喚く聲。ヲ、くゝとばかりにて。あなたこなたと這ひ廻り。やうゝと身を押込に。千代を忍ばせ半兵衛は。戸をあくれども打開けぬ。胸塞がりてきよろゝと。フシ物をも言はず立ちまへば。地色嘉兵衛も共に隅々を覗き廻りて押込を。あけんとするを立隔たり。嘉兵衛慮外な何故あくる。ハテ珍らしい御咎め。此押込は道具入れ。用があつてあけます。イヤゝゝ用があるにもせよ。宿へ戻つて直ぐ様に。其上包んで手に提げしは。いつかたて取つて來た。ム、風呂敷包みの疑ひなら。是御覽あれ赤毛氈。ハテ似合はぬ物を持つてゐる。イヤ様子は追つて申すべし。夫婦の衆の留守の内。地櫃のとろくへ納めんと。明けにかゝれば手を取つて。詞近頃小氣な男かな。見付けられたら半兵衛が遠州土産と言うておけ。地先づ下に居よ商賣の返事が聞きたい獻立は。フシどうぢやゝと紛らかす。地色詞のはづれ顔の色心は附けど附かぬ振。押鎖まりて畏り。詞明日のお振舞お客の方から獻立が。謎に致して参りしをあらましばかり覺え書き。地開し召せとぞ讀上げける。先づ本汗に大寺やほとりに遊ぶ童は。フシちしや白魚と知られたり。有情非情の乗台に棹なき舟の行方とは具焼などの事ならん。木の葉折り敷く其上に。からくれなゐの心中とは。哀れとぞ見る子持鯛。添ふに添はれぬ中々にいつそ又に刺身とは。包めど我が吸物に幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が變れば氣も變り。又面白く獻立の出来まいものにも候はず。定めなき世は人の常何をか恨み葛餅が。後段の筈に候と。心に餘る意見狀押當てゝ。こそ讀みにけ

る。地色半兵衛はさあらぬ顔。調叔面白き獻立や。併し魚類の振舞をなせ肴屋は請取らぬ。さればそれにも咄あり。お出入致す肴賣りに。堀江彌兵衛と申せしは。地器量はさのみよからねど戀路の手だれ上手者。惚れたお山が三百人。忍んで逢ふが四五十人。中に取つても若松屋なをと互に腐り合ひ。女房に持つぞ持たれんと。契りをかけす間々に市とやらいふ生娘と。ちえ／＼くり事が嵩じて來て。はや五月の腹に帶。隠されもせず親も知り。つい呼入れて嬉びろめ祝儀の樽を贈るやら。三國一を謠ふやらそこらあたりがざゝめけばなをが燃え立つ胸の火に妓女傍輩が焚付けて。彌兵衛が往てゐる先々へ附いて廻つて恨み泣き。喰付き喰付きしがみ付き。去るか死ぬるか死ぬるか去るか。二つ一つとせたらげられ孕んだ女房は去なされず。なをはい／＼堪忍せず。是非に及ばず心中し難波の野邊の草の露。名は繪草紙にとゞまりぬ色と義理とに迫つては。日頃の智慧も出でぬもの。そこが膝とも談合てこちとが様な者にても。明かして言はゞどうぞ又死なさぬ首尾もあるべきに。聞えぬ堀江の彌兵衛やと。フシむしりかけたる口占に。地色半兵衛ぎよつと行詰り物をも言はず押込の。内にお千代はわくせきと身を悶えたる胸震ひ。襖に響き敷居までびりゝびりゝと鳴り渡れば。女はうちらて鼠泣き。男は外から猫の真似。フシ憂きが中にもをかしけれ。地色嘉兵衛そろりと立上り。美濃吊しなど引かれては。元が息になる穿鑿とつか／＼と立寄るを。半兵衛周章で突倒し。調嘉兵衛お主も相應の惡所遊びもする男。ひよつと出合ひの初戀を見現はしては興がない。地そこらは粹め氣を通せ。フシ通せ／＼と詫びにける。地色嘉兵衛疊打叩き。調あんまりそれは曲がない。なぜ有様におつしやれぬ。私ことは二三度も追出されたる身なれども。伯父仁右衛門に色々と詫言立てゝ給はりし。お前の情で立つてゐる。嘉兵衛に何の遠慮があるいか程隠し給うても。地聞かねど知れた御心底同行衆の扱ひが。叶へば重疊さもなくば刺違へんとの言合せ。見付けた所は違ふまい切なうも悲しうも。思し召さるゝ筈なれども死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど銀に詰まるか逢ふ事の。ならぬ切迫の時にこそ。八百屋といへば輕けれど勝手乏しい事はなし。上町邊に借屋を借り行通うても

逢ひ給へ。たとへ五貫目三貫目帳面合はぬ事あらば。嘉兵衛一人が引負うてお二人の名は出すまい。命の代りに立てたい。思ひ込んだる私が詰らぬ。意見は仕らぬ。思案を變へて下さりませ。縋り付いても取付いても。中々死なせはしませぬと。誠を立つる男泣き。フシやさしく。も亦わりなけれ。地色半兵衛も稍涙ぐみ。慈悲なる親の血筋とて。

頼もしい氣を持つものかな。其心とも汲み知らで隠せし所が面目ない。お千代／＼と呼びかくれば。おもはゆげにも立出づる目は泣腫れて顔瘦せて。見交すばかり打守り。ナウおいとしやと。スエテいふより外は。なかりけり。地色半兵衛心に思ふ様死ぬると言はゞ此者が。附纏うて離れまじ。謙して此場を遁れんと世に嬉しげに打笑みて。詞げに負うた子に教へられ。淺瀬を渡るといふ如く其方が意見にて。兎や角思ひくづ折れしも洗うた様に打晴れた。地借屋の事も内諍も萬端お主を頼み入る。當分は先づ親里へ房して置くがよい道理。女房嘉兵衛に禮言やと偽り知らす目くばせに。お千代もやがて合點してお志の數々は。どうも詞に盡くされず。夫婦が命の親様と手を合はすればこちらにも。若輩者の言ふ事を得心あつて嬉しやと誠と嘘の笑ひ聲。フシ夢に夢見る如くなり。地色仕済ましたりと半兵衛はお千代と共に立上り。伯母の方まで宵の内送り届けて明朝は。駕で故郷へ送るべし。親父や母の歸られたらまだ庚申から戻らぬと。どぎ／＼首尾を合はせると言捨て行くを引きとどめ。件の毛氈差出し。詞お鴉の内の敷物に進上致すと申す儀は。慮外がましく候へども嘉兵衛がための寶物。追出されたる其御友達どもが指差して。疊の上では死ぬまいと薩言いふが無念さに。心直して去んで見しよ。地それとも願ひ叶はずし辻垣下で死ぬるとも。毛氈敷いてゐるならば疊の上も同然と。意地を立てたが身の幸ひ。再び此家へ立戻る嘉兵衛にあやかり給へとの。フシ御祝儀なりと言ひければ地色お千代はちつと笑顔して何より嬉しいお心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らんと。詞のはづれ氣も付かねフシさすが若氣の不覺なり。地色然る折ふし仁右衛門夫婦同行衆と高咄はや門近く立歸れば嘉兵衛騒がずお千代をば。小櫃の先に屈ませて半兵衛共に椎茸の。フシ苔を選つて居たりけり。仁右衛門戸口に立休らひ。太郎兵衛殿五右衛門

殿七兵衛殿には取分けて。遠方といひ夜も更ける。平にお歸り遊ばされい。ハレヤレいはれぬ御遠慮。お膝を抱きに三人が申し合はせて參るから。七兵衛一人は歸られぬ。地夜食は食べる引つかける煙草一服御亭主のお氣抜ひにはなるまいと。明くる港戸我ひと。オクリせり合ひへ内に入りにつけり。地色五右衛門先へ進み出で。詞早速ながら申しましょ。御夫婦共によう聞かしやれ。是の嫁御が去られても手前に損も仕らず。呼戻されても此方に別に利得もなければ。よくく懇意に思ふ故宵から今迄三人が。取付け引付け願ひの。かいだるい程詫びれども。あへんども打たれぬは侮つての儀か但し又。大切な事餘所外て言つてわざな仕方ぢやと。ふくればしあつてかと是まで附いては來たれども。言ふべき程は最前に底を叩いて仕舞うた故。地急に才覺なりませぬ。フシ兩人出やれと押し退さる。地色太郎兵衛鬚龍に腰をかけ。夫婦合ひには別儀なし不義放埒だにあらざれば。何を仕落何を非難に去なすべき。姑去りに極まつたりたとへ五日が十日でも。お千代の顔を見ぬ内は。太郎兵衛が朝夕を。此内て養はれんフシかたがた。いかにと詫びにける。地姑はつゝと出で。詞ア、太郎兵衛様よい推量。仁右衛門殿は佛様。女夫の仲はちんく。去なしたは此母。お前の様なよい衆の嫁御にしては似合はうが。此方づれの内にて飯をも炊かにやならぬ身で。肌には小袖鼻紙は。延べでなければ手に觸れず。地わしらはお寺の奉加さへ百目の銀は太儀なに。五兩とやらの櫛を挿し島甲程鬘出して。太夫の道中する様に狭い所を八文字。そこらあたりの青物は。踏み潰されて芥になる。其費でも積つたら此身代はひづみましょ。是が八百屋のお内儀に。フシ成り遂げうかとえせ笑ふ。地七兵衛にじり寄り。詞こなたの様に言ひ立つれば。託言の手はあがれども。どこを聞いても其様によい事ばかりは揃はぬもの。身どもが嫁は随分と。世帯はようする歩くにも。八文字は踏まねども一文字を得引かいで。是も又氣の毒。仁右衛門殿。そなたもちつと物言はしやれ。地囃がこはさに黙つてか。結構者ぢやと囃されて。あんまり自慢遊ばすな。詞結構とは冥加の事。とうなるとは野老なり。せいなんとは芹の事。半兵衛連添ふお千代なら。小殿原ではござらぬか。もし闇の夜のつれをのこ

心中などを召されたら。地取返しはならぬぞやちと相談もして見給へ。調いかにもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば短氣を出すまいものでもなし。腹に物言ひありとも聞く。孫を愛して遊ぶなら嫁の憎さも忘れん。ナウ囃。地何と思やるとやはらを入れてうら問へば。いか様こなたは如來様。調三十年身の油絞り溜めたる金銀が。地忍ち水になる事を見ながら孫がかはゆくば。はてどうなりとなされませ。調したがわしには暇下され。短い浮世に氣に入らぬ顔見て修羅を燃そより。地頭こそげて未來をば。助かる様に致さうと。フシ緩む氣色はなかりけり。地色仁右衛門今は詮方なく半兵衛嘉兵衛爰へ來い。調様子は今聞く通りの事。いかにお千代に添ひ度うても母を坊主にやしられまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扱又嘉兵衛もよつく聞け。今では心持直し身を持ちさうに見ゆる故。幸ひ甥御の事なれば家督にせんとと思ひ付き。嫁を追出し半兵衛も出て行く様にしかけると。世間の人に誦はれては仁右衛門が名が汚れる。地一夜も足はとめさくれぬ今出て行けといひ渡す。嘉兵衛驚く氣色もなく。お前の詞を請けずとも此方から出て行こと。思案極めてをる故に恨みには思はぬが。胸慥なは姑御。調嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ。嘉兵衛は爰を出て行く。と明日から路頭に立ちますぞや。地お寺参りの行戻り孤をかぶつて付け廻らば。餘りみめてもあるまいが。それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬかと恨みても聊ちても。心つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく。ずつと立つて行く所を半兵衛は引きとめ。調ヤレ狼狽者どこへ行く。お暇が出たで去にます。先づ待て。地イ、ヤ暫しとて押合ひへし合ひ引据ゑて。調コレ親父様。早まり過ぎた御了簡。母の言分一々に尤至極と思ふ故。千代めは身どもが去りました。誰に恨みもないからは家出を致さう様がない。それに此者追出せば結句にお名が出つる事。同行衆にも今迄の千代が扱ひ捨て置いて。地親父様へ嘉兵衛をば。詫言頼み存ずると。聞くより三人頷き合ひ。調渡はこちとが手に合はぬ。仁右衛門殿は結構者。地嘉兵衛事を詫びます。調ヘテどうなりと御意次第。地あんまり早うて本意ないとおたり笑うて。いこそは歸りけれ。地色母は兎角の詞なく奥へはいれば仁右衛門も。入らんとせしが立戻り。調半兵衛

一つ飲んで寝や。地酒は憂ひを拂ふとは。醫書にも書いてあるげなと。フシしをくとして入りにけり。親の恵みは深けれど。御縁は今が限りぞと。お千代もそつと這出でて。スエテ共に見送る後影。嘉兵衛は何の氣も付かず締めあけにする藩の戸。早うく招けども猶も名残はをし鳥の。なかじとすれどせき兼ねて。わつと叫べば洩らさじと。打ちかぶせたる。毛氈の閣より。閣に三重出でて行く。

## 道 行 星 の 數

我が戀路は糸なき三味よ。く。なんのねもせて泣きあかす。合見れば思ひの雲の帯く。合扱も。短夜。心のせくにござんせ。合いやと。おしやろとこちやもう。さうさんせ。二人が仲に。名取川。おゝそれ。二人と二人と名取川。ナホスフシ濡れて涙の血に染むる。フシ田簀の島と。詠み置きし。難波のことも是ならん。よしあしのや變る世の。それも思へば夢うつ。フシ靱を出て二人連。色の外なる色毛氈ひじき物よと肩にかけ。フシオクリつらき名残も。今宵ぎり。フシ生れかはりて。先の世は。とても殿御の古里の。オクリ松濱風に誘はれて。本フシ離れぬ仲の睦言を。仇になさじと思ひ詰め。夜の玉銚道急ぐ。長地知死期くる。數珠のかず煩惱菩提と聞く時はあの世ばかりの楽しみに。行かんとすれば卯月閣。涙にくれて道見えず思ひ。廻せばはかなしや交せし。ことの浅からぬ。隔ての雲の重なりて。二世と契りし仲を裂く。月に水まさ花に風。津村の土手をあたし野の。スエテ其倂と草深き。アミドフシ蟄かすかに飛びつる。身より思ひの餘ればや。フシ蟲さへ胸をや。こがすらん。夜も早いとく更けぬらん。わけとなき行く郭公。半太夫フシまこと冥途の鳥ならば地獄の有様語れ聞こ。フシ聞くとはいかて。變らめや。今宵限りのうき命。止めて止まらぬ。三瀬川。ナホス岸に繋ぎし綱手こそ。弘誓の舟と。フシ觀念し。スエテ歎く心は曇れども曇らぬ。空の星月夜。あらまほしやといふ星も。年に一夜の契りぞや。たとへば雲の上とても。天の河を隔てなば。人の

つらさに變らじな。糸かけ星の。ほそくと。附添星や。妬むらん思ひ星とは七夕の。縁と聞けどまゝならぬ。フシ浮世に似たる類ぞや。○地光もうすく丑寅にあれく見ゆる星様は。△詞ヲ、假のうつゝのほし佛。地やどり星とはいつ迄も。二人妹背變らぬ夫婦間。フシ我身の果はすばる星。○地ア、思ふまい心からたとへ奈落に落つるとも。祭文跡に歸らじさりながら。女はいとゞ罪深く。従ふ道も忘れ水。哀れ都のひぼのほし。結び目とけて濁江に。うかれし事を思ふには。あまねき門に立寄るも。ナホスフシ爰ぞ一念重願寺。フシ念彼觀音の。力ぼし助け給へと諸共に。心をこめて願ひばし亂れ心の亂るゝとも。利劍卽是の誓ひにて。心やすく極樂に至り至らんこなたへと。スエテ互に勇め進む身の。フシ勸進所に。にぞ着きにけり。

捨つるに極めし。身の上も。そごろに心細げにて三途の川は目の前の。麥吹く風の小波や。空淋しくも名乗るてふ。死出の田長を友がねに。さいたら島の案山子かと。見るにつけ聞くにふれあの世に。たぐふぞあぢきなき。地色半兵衛お千代に差向ひ。詞此勸進所のお寺には談義の絶ゆる時もなう。千萬人の參詣に一遍づつの御回向も。地つひに罪障即滅の法の縁こそ。頼もしき。爰ぞ最後の場所とやがて用意を敷きかくる。朱の褥の毛氈や嘉兵衛が。くれし其時は。間長く身上持ち堅め町屋住宅据ゑよとの。地心には今引替へて死出の門出の相延未來は蓮の臺とも。變じて浮むよすがぞと二人しづかに座を占めて。詞人間一生あざなへる繩の如くと傳へしは。今日の身の上。八軒屋で出合ひし時互に書置明かし合ひ。危き命を夫婦とも通るゝ上は老先も。諸白髪まで添ひ果てん。思へば愁ひの文ではなく。結ぶの神の守札。地末頼もしや目出度やと祝ひし事も夢現。醒むれば元の書置よな。とてもかくても死神に引かるゝ縁は辻占の。時のぎえんもなきものと。フシ身を觀じてぞめたりける。地色お千代はいとゞ打萎れ心中といふ二字は。流れの女に限りしと昨日は餘所に思ひしに。今日は夫婦が身の上に飽きも飽かれもせぬ仲を。由ない障りに隔てられ仇に朽ち行く是非なさと。フシ平伏し。てこそ泣きにける。地色半兵衛涙にくれながら。詞ア、おろかなる悔みごと。

兎角二人が腐り合ひ。切られぬ縁を恨むがよい。女房去るに七つの法。去らぬに三つの教へあり。中にも親の氣に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに暇をやつたらば孝行の道は立つ。しかしそなたの親里は。養ふ風情もない貧家。すりや去所ない同然。去るに去られぬ教へなり。地此二道に差詰まり斯く下る有様は。もとより覺悟と詞にはいへども洩るゝ露涙。詞痛はしや十藏殿。常さへ武士の突詰めた。氣質ながらも半兵衛は。武士を捨てよと御意見は。我が行末を安穩に。地あらせん爲の教へをば今やみ／＼と死したらば。さぞやお悔み歎きの程。思ひやるさへ。フシ勿體なや。地色 養親の仁右衛門殿。お氣の弱い生れつき。此譯を聞き給はば老後の憂ひ持病の種。彼といひ是といひ一方ならぬ不孝の罪。空恐しき身の上と。スエテ口説き。立つればお千代も亦。穂にあらはれて叫び入り。ア、我とても道ならぬ。歎きをかくるは同じ事。老いたる母の手一つに。育て上げられ人と成り丁度今年が廿四の。年重なれど今日が日まで。是ぞと思ふ孝もなく。つひには双に身を果たし。愁ひを見するばかりかは。入まへの程世渡る業。老の湯水は誰が取つて御心を休むべき。不孝ともつたなしとも。我からわかぬ身の上を。許してたべや母様と。ほとりも知らず手を合はせわつと。ばかりに泣きまどふ。詞半兵衛は顔を上げ。ハアいつまでいうても同じ事。夜明けぬ先に最期をば心靜かに遂ぐべしと。地西に向ひて手を合はせ。利劔卽是彌陀號。南無阿彌陀佛と回向する。お千代は沈む涙さへ落ちて乾かぬ小硯を。懷より取出し。詞斯うならうとは知らずして西の宮参りして。地須磨や明石の名所をも。記し置かんと求めしが。今引替へて書置の。御用意もやと差出せば。詞ナウよい合點さりながら。我一代の書置は懷中の狀箱。心にも文言にも死する時節に二つはなし。地そちこそ早う書置しや。詞イヤわしとても先達つて去られた時の書置が。小母様の手にあるからは。是ぞ末期のとどめ筆。地あだの思ひの数々はとてもに書きは盡くされず。しかし辭世の言の葉を残し給へと勸むれば。半兵衛鎖き筆を取り。詞げに世の常に死したらば。野べの送りの引導に一句一偈も受くべきに。この盛行かんはかなさよそなたも一首口ずさみ。

自らは是を引導とも經帷子の梵偈とも。地回向の種と案じつゝ硯引寄せ書付くる。文字もちら／＼星月夜。詠み續けたる其歌に。はる／＼と濱松風にもまれ來て。涙に沈むざんざの聲。お千代同じくかくばかりいにしへを。捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれと。兩首一所に卷納め。半兵衛は懷中より件の狀箱取出し。辭世に相添へ前に据ゑ。思入つたる體なりしが。胸押しくつろげ脇差を。すらりと抜いて脇腹より。前へなかば引廻す。お千代は取付き聲を上げ。こは情なの御事や。女は心おろかにて覺悟してさへ狼狽ゆるに。ひとり先立ち給ふのは。扱は我が身を捨つるのか。恨めしや胸慾と。フシ悶え震ひて歎きける。地色半兵衛ちつともわるびれず。詞女心の淺はかさよ。是程の傷で死なんとはおろかなり／＼。様子あつての切腹。抱帶を二つに切り其一筋にて切口を。地急いで卷けと聞くよりはや周章てゝほどく抱帶。心は何と白縮緬用意の剃刀取出し。せき狂ふ手も震ひながら。やう／＼中より押切つて夫の肌を引廻し。しつかと締めてうろ／＼と顔をながめて涙ぐむ。詞半兵衛詞おだやかに。そなたが最期の顔も見ず。何しに先立ち行くべきぞ。此脇差は某が此地へ養子に來る砌。主君よりの拜領。武士の刀は忠義を胸とし。町人は又禮儀に差す。大切の一腰を武道にも用ゐず。禮儀にもかゝはらず。穢らはしき兩人が最期にばかり使はん事。勿體なし冥加なし。武士の眞似して引廻すは主君への追腹。山脇氏に立戻れば親十藏が封印も。破つて破らぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが。地今の八百屋の半兵衛ぞと。齒を喰ひしめて息をつき。これお千代。その半分の抱帶。そなたが腹にしつかと締め。四月になるかならぬ子に。せめて末期の祝ひ納め。世にあるならば來月は。帶の祝ひよお乳母よと。さも勇ましくあるべきに。明日をも待たぬ今の身は。五月とも産月とも。つゞめて名残を惜しむぞと。フシそゞろ涙にくれにける。地色お千代は帶を取上げて。しやくり上げ／＼。スエテ前後涙に。沈みしが。地生れぬ先に行末を頭堅かれといはた帶。長地それは世にある人の事はそれとは引替へて長き別れの親子の縁。斯くなる身とは知らずして嬉しや子をば産んだらば。二人が仲の楽しみに。明暮れ抱いつすかしつの。愛らしい事見る

度に憂きが中をも打忘れ。夫婦は猶も親しみの媒介となり一つには。世に子を持てば世帯じみなり形をも憂すとや。然らば我が思はずの伊達も自然とやむであろ。姑御にも氣に入らうあら嬉しやな産宮様。平産させて給はれと。願ひし事はいたづらに。身持ながらに消えて行く。名残は我が身一つにて。別れは二つ人間の種を斷つのも同じ事。何の咎なき腹な子を。共に死なする不便さよ。許してくれよと詞さへ。泣く／＼帯を取上げて。肌を廻し引締めて。顔見ぬ母が形見ぞと。スエテかつばと。伏して泣きにける。地はや引渡す山かつら寺の晨朝告げ渡れば。いざや最期の時こそと座を打拂ひ身構へす。お千代は覺悟の面ざしも名残の花のあてやかに。露持ち餘る風情にて。フシ手を合はせてぞ坐しにける。地色半兵衛につこと打笑ひ。詞ヲ、出来たりいさぎよし。地未來は一所ぞ迷ふまじ。今ぞ限りと脇差を。取直せしがさすが又。長き別れの顔ばせに。心も騒ぎ腕たゆく。差付けてはためらひ突かんとしては堪へかねて。暫し時刻を。うつせしが。地色南無三寶おくれしと氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と刃の先。喉にぐつと突通せば。あつとばかりに身を悶え。手足を伸べて苦しげな中にも夫を打守り。打守りたる一念の。輪廻の心ぞ。果てしなき。されども四つの借り物を返ししまへば油なき。燈火消ゆる如くにて。がつくりと伏す有様は。フシ哀れにも亦惜しかりし。地色いで追付かんと半兵衛は。主のゆかりの一尺五寸最期の際と押戴き。只一刀に喉笛を。フシ貫かれて死したりけり。地色生年既に三十八。花過ぎ頃の若緑木の下閣は青物や。町人なれどいにしへの。武道の燈が、げたる末に。名をこそ照らしける。

心中ふたつ腹帯 終